

児童虐待に対する教師の意識に関する調査研究 (2)

—教師の職業的社会化に関する予備的分析—

藤田 由美子 *田中 陽子 *横山 裕 **長友 真実

Research on Teacher Attitudes toward Child Abuse (2):
A Preliminary Analysis on the Teachers' Occupational Socialization

FUJITA, Yumiko *TANAKA, Yoko *YOKOYAMA, Yutaka **NAGATOMO, Mami

Abstract

The purpose of this article is to examine teacher attitudes toward gender and children in relation to their socialization by an analysis of questionnaires to teachers, as a part of our collaborative research on teacher attitudes toward child abuse.

We conducted our research during July 2005. A total of 479 teachers in the northern part of the Miyazaki Prefecture responded to the questionnaire. Questions are about their attitudes toward child abuse, gender, children and family, their past and present experiences, and so on.

The findings are as follows: female and younger teachers tend to perceive male hegemony, male or management teachers tend to deny compatibility of job and childcare for females; female teachers see children as the active agents, male teachers see them as subordinate agents; regression analysis revealed some relationships between their attitudes and past experiences.

We discuss the results in terms of structures of teacher groups and gender/power differentiation of attitudes towards gender and children, as the basis of their attitudes toward child abuse.

Key words : Teachers, Attitudes toward Gender, View of Children, Occupational Socialization

キーワード : 教師, ジェンダー観, 子ども観, 職業的社会化

2006. 1.18 受理

はじめに

本稿の目的は、教師の子ども・ジェンダーに関する価値意識を、かれらの子ども時代の経験と職業的社会化経験との関連を中心に明らかにすることである。本稿は、平成17年度学内共同研究「児童虐待に対する教師の意識に関する調査研究」(研究代表者: 田中陽子)の一環として行った、「児童虐待に対する意識調査」の教師回

答データの分析結果にもとづくものである。

ここで、本学内共同研究が行われるに至った背景について、簡単に述べる。1990年代以降、児童虐待は児童福祉における深刻な問題のひとつとして取り扱われるようになった。もともと日本の学校教育において、教師は、学級・ホームルーム担任として、教科指導ばかりではなく生活指導で重要な役割を担うことが期待されてきた。児童虐待が社会問題となった近年、2000年に「児童虐

九州保健福祉大学社会福祉学部 福祉環境マネジメント学科 宮崎県延岡市吉野町 1714-1 〒882-8508

*九州保健福祉大学社会福祉学部 臨床福祉学科 宮崎県延岡市吉野町 1714-1 〒882-8508

**九州保健福祉大学 健康管理センター 宮崎県延岡市吉野町 1714-1 〒882-8508

Department of Social Welfare and Environmental Management, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508 Japan

*Department of Clinical Welfare Service, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508 Japan

**The Health Management Center, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-cho, Nobeoka, Miyazaki, 882-8508 Japan

待の防止等に関する法律」が施行され、学校の教職員もその早期発見に努めるよう求められた（第5条）。したがって、教師たちによる児童虐待問題に対する理解がますます求められていると考えられる。

児童虐待に対する教職員の知識と対応の実態については、教職員を対象とした調査¹⁾によって明らかにされている。しかし、教師自身による援助実践の実態の背景にある社会的文脈との関連を検討する必要があると考えられた。

また、児童虐待の兆候に「気づく」上では、教師自身の人権感覚が重要であると考えられる。それは、かれらの子ども時代の経験、および職業的社会化の経験、教職での社会的・心理的状況等が大きく影響しているものと考えられる。

そこで、児童虐待に対する教師の意識について、子ども時代の経験、職業的社会化の経験、教職でのストレス状況、そして人権観（ジェンダー問題も含む）との関連で検討するために、2005年7月に質問紙調査を行った。

本稿では、教師の職業的社会化と価値意識を中心にした予備的分析により、次のことを明らかにする。第一に、児童虐待の予防・発見においてひとつの役割を期待されている教師たちがいかなる過程で、いかなる価値意識を持つにいたったか、そのメカニズムを明らかにする。第二に、その教師集団で共有されている価値意識構造を明らかにする。

先行研究の知見

—教師の職業的社会化と価値意識を中心に—

1. 教師の職業的社会化研究

(1) 教師の社会学研究における位置づけ

教育社会学の領域において、教師研究は重要なテーマのひとつである。教育社会学会の学会誌『教育社会学研究』においては、1988年、「教師の社会学」というテーマで特集が組まれた。耳塚、油布、酒井は、レビュー論文のなかで、各研究論文を、①教職の社会的特質、②教師集団、③教師の職業的社会化、④教師の教育行為、の4つの領域に分類している²⁾。このうち、「教師の職業的社会化」については、「この⁽¹⁾15年間に急速な発展を遂げた (p.97)」²⁾と述べている。それは、職業を通じての成人の社会化過程、教師の職業的社会化が社会体系に対して持つ機能、について理論的課題が多いと考えられた（同上書）。「教師の職業的社会化」研究は、理論的にはパーソンズの構造機能主義モデルに依拠している。1980年代当時、この研究領域は教師の社会学研究で重

要な意味を持つものであった。

(2) 先行研究の動向

教師の職業的社会化に関する研究の動向を概観する。深沢と対馬は、体育教師の職業的社会化について分析を行った。その結果、生育地域の運動熱の高さ、自分の家族が運動に興味・関心を持っていたこと、授業以外でのスポーツを行ったことなどの社会化要因が明らかになった³⁾。また、南本と加野は、生涯学習の視点より教師の学びのありようを明らかにした。回答者の中には、大学で講義や専門の勉強に力を入れていた者がもっとも多い。また、自由な時間を多く持つことができる教師は、家庭での自己学習を行っている者が多く、さまざまな学習活動を行っている⁴⁾。

管理職の職業的社会化研究も行われている。小島ほかは、教育管理職の職業的社会化を分析した。教師としての力量は40歳までにほぼ形成されるが、管理職はこれらに加え同僚や先輩とのつきあいの力量が形成されていること、校長は一般教師に比べ意欲・努力がより顕著で、かつ指定校としての研究活動や管理職のリーダーシップ・アドバイスも影響していることなどを明らかにした⁵⁾。南本と渡部は、女性教頭職の職業的社会化について分析を行い、女性教師の管理職昇任の重要な要因は学校運営の中心的役割を担うことであること、女性教頭が管理職の職務を遂行するさいには家庭生活と職務との兼ね合いが大きな問題であることを論じた⁶⁾。

現在、教育社会学の分野で、「職業的社会化」に関する議論は、かつてほどには盛んに行われていない。その背景にある要因は複合的である。教育社会学研究の立場からは、ひとつには「社会化」的問題設定の批判が挙げられよう。1980年代以降に盛んになった葛藤理論や再生産論の立場から、「社会化」という問題設定は、既存の社会的枠組みを正当化する、と批判された。

(3) 近年の「資質・能力の向上」議論をめぐって

近年、教育に対する実践的な関心より、教師の力量形成（職業的社会化）に関する議論が行われている。1990年代以降の教育改革をめぐる議論のなかで、教員の「資質・能力の向上」をめぐる議論がみられる。その多くは、哲学的な見解、および実際的な方法論によるものである^{7) - 9)}。

その中であって、教師（教員）がいかなる仕方で形成されるか、そのメカニズムと構造を教育社会学的方法によって明らかにすることは、今なお重要であると考えられる。その際、教職課程や現職研修といった「点」としての教師形成にとどまらず、「生涯学習」、「ライフコース」¹⁰⁾や「ライフサイクル」¹¹⁾というように、「(生涯にわた

り) 成長する教師」という視点を採用した分析が、有効であろうと考えられる。

2. 教師の価値意識

—ジェンダーと子どもに焦点化して—

本稿では、教師の価値意識のうち、ジェンダー観と子ども観に焦点を当てて論じる。ここでは、教育社会学の領域におけるジェンダーと子どもの取り扱いを概観し、本研究の意義について論じる。

(1) 「ジェンダーと教育」研究における教師への眼差し

教育社会学における「ジェンダーと教育」研究のなかで、教師自身の教育実践に注目した研究は、何人かの研究者によって行われてきた^{12), 13)}。教師の子どもに対するかかわり方に注目し、その実践のありようを分析するものである¹⁴⁾。

ジェンダー観の尺度作成¹⁵⁾も含め、ジェンダー観を明らかにするための対象の多くは生徒あるいは学生であり、ジェンダー観またはジェンダー意識が何によって規定されるかが注目されてきた^{16), 17)}。つまり子どもたちを対象にした「ジェンダーへの社会化」過程が研究の中心であった。

教師たちのジェンダー観に関する分析としては、鈴木らによる研究がある^{18), 19)}。この研究は、ISRO (Index of Sex Role Orientation)²⁰⁾ 得点を用いて教員のジェンダー観を測定し、ジェンダー形成要因と男女平等教育との関連を行ったものである。教員のジェンダー形成に影響を及ぼすものは、性と親子関係である¹⁸⁾。また、ISRO 得点が高い、つまり性別分業を肯定する傾向の高い教員は、学校における性別区別の意識が強い傾向にある¹⁹⁾。

教師たちのジェンダー観を分析し、その構造を探ることは、社会における教師集団の位置づけを検討することに寄与する。それは、教師への子どもたちへのかかわりのありようを探り、同時にその課題を浮き彫りにするうえでも、有意義である。

(2) 教育の対象としての子ども

子ども観については、近年、住田とその共同研究者によって構造的に分析が行われている²¹⁾⁻²³⁾。一連の研究報告の中で、子ども像についての意識と子どもに対する態度との関係について、世代間比較が行われている。たとえば、子どもの社会化については大人がしつけ・教育を行っていく考えを持つ人が回答者の8割に達することが明らかにされた²²⁾。また、しつけ・教育を強調する「教育主義」的価値観を持つ回答者は、「自然発達主義」的価値観を持つ回答者に比べ、大人との関係を「従順」「大

人優先」「礼儀正しい」といった考えを持つ割合が高いことも述べられている²³⁾。

住田らの研究では、一般の市民を対象に調査が行われている。本研究では、教師の子ども観の構造はどのようなものであるか、明らかにする。

また、教育やかわいがりの対象、あるいは大人への従属的存在として子どもを見るばかりではなく、主体的な存在として子どもを捉えることに関しても、教師たちの意識を明らかにする必要がある。1989年に「子どもの権利に関する条約」が採択され、日本では1994年に批准された。教育現場で日々子どもに接する教師たちに共有されている子ども観は、主体的な子どもであるのかそれとも従属的な子どもであるのかを分析することは、児童虐待に対する教師の意識を明らかにする上で有意義である。

調査の概要

1. 調査の実施

2005年7月、研修会に参加した教職員および保護者を対象に、質問紙法による調査を行った。調査票は「児童虐待に関する調査」と題し、下記のような質問項目から構成されていた。

(1) 全回答者に共通する項目

- 1) 基本的項目：年齢（5段階）、性、配偶者の有無
- 2) 中学生時代の経験（15項目）：学校、家庭、仲間関係、ほか²⁴⁾
- 3) 現在の価値意識：ジェンダー観（Dreyer et al. (1982)；伊藤（1997）にもとづく16項目）^{20), 25), 15)}、子ども観（11項目）、東洋の価値意識（12項目）、児童虐待に関する意識（15項目）
- 4) 児童虐待の判断指標：子ども（22項目）、保護者（13項目）²⁶⁾

(2) 教育関係者に限定して尋ねた項目

- 1) 職歴に関する項目：在職年数（7段階）、現在の勤務校（校種、学級数、地域・立地）、職務、学級担任の有無、生活指導・学校保健校務の経験²⁷⁾
- 2) 児童虐待に関する経験：被虐待児童の担当経験、対応、関連法規や連携先の知識、研修の経験、校内組織
- 3) 職業的社会的経験：大学時代の経験（6項目）、現在の学習状況（9項目）⁴⁾
- 4) ストレッサー尺度（40項目）²⁸⁾

調査票は、研修会主催者の協力により、資料に添付して配布され、退出時に備え付けの回収箱に提出する方法

で回収された。

回収数は695, このうち有効回答は642であった。本稿は, このうち教師による回答479件(有効回答数の74.6%)についての分析結果に基づく。

2. 分析の枠組み

本研究の主要なテーマである「児童虐待」に関する項目の詳細な分析は次稿以降に譲ることとする。本稿では, その予備的な分析として次の分析を行う。

- (1) 教師たちの人間形成過程および職業的社会化過程: 児童虐待に対処する教師たちの価値意識の基礎はどのようにして形成されているか。
- (2) 教師たちの価値意識: 教師たちはいかなる価値意識を有するのか。本稿では, 主にジェンダー観と子ども観に注目して分析を行う。
- (3) 教師たちの価値意識を規定するもの: 教師たちのジェンダー観と子ども観は相互にどのような関連を持つか。そしてそれはかれらの人間形成および職業的社会化にかかわる諸経験とどのような関連を持つか。

なお, 本稿で分析を行った項目のモデル図は, 図1に示したとおりである。

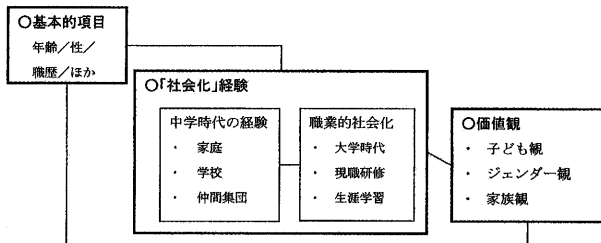


図1 分析モデル

注 本稿での分析項目のみ示した。

3. 回答者の基本的属性

回答者の基本的属性は, 表1に示したとおりである。

表1 基本的属性

| 年齢 | -29 | 30-39 | 40-49 | 50-59 | 60- | 合計 | | |
|------|------|-------|--------|----------|--------|--------|-------|-------|
| | 実数 | 77 | 172 | 177 | 48 | 3 | 477 | |
| % | 16.1 | 36.1 | 37.1 | 10.1 | 0.6 | 100.0 | | |
| 性別 | 女性 | 男性 | 合計 | | | | | |
| | 実数 | 266 | 209 | 475 | | | | |
| % | 56.0 | 44.0 | 100.0 | | | | | |
| 配偶者 | 無 | 有 | 合計 | | | | | |
| | 実数 | 153 | 321 | 474 | | | | |
| % | 32.3 | 67.7 | 100.0 | | | | | |
| 在職年数 | 1年 | 2-5年 | 6-9年 | 10-19年 | 20-29年 | 30-39年 | 40年- | 合計 |
| | 実数 | 27 | 73 | 51 | 170 | 131 | 22 | 2 |
| % | 5.7 | 15.3 | 10.7 | 35.7 | 27.5 | 4.6 | 0.4 | 100.0 |
| 校種 | 幼稚園 | 小学校 | 中学校 | 合計 | | | | |
| | 実数 | 13 | 284 | 180 | 477 | | | |
| % | 2.7 | 59.5 | 37.7 | 100.0 | | | | |
| 職務 | 校長 | 教頭 | 教諭(主任) | 教諭(主任以外) | 養護教諭 | その他 | 合計 | |
| | 実数 | 12 | 20 | 152 | 225 | 19 | 38 | 466 |
| % | 2.6 | 4.3 | 32.6 | 48.3 | 4.1 | 8.2 | 100.0 | |

年齢は30歳代および40歳代が多く, 性別は女性がやや多い。また, 回答者の3分の2以上が配偶者を持っている。在職年数については, 10-29年の範囲がもっとも多い。職務については, 教諭が多数を占め, 主任・非主任あわせて80.9%である。また, 回答者の約3分の2が現在学級担任をしている。回答者のうち, 3分の2が生徒指導・生活指導の校務を経験しており, 3分の1が学校保健の校務を経験している。

分析結果

1. 教師の職業的社会化経験

(1) 全体的傾向

職業的社会化に関する項目の素集計を行った結果の概略について述べる。

a. 大学生時代の経験

子どもの人権について学んだ経験を持つ者は, 回答者の過半数に及ぶ。他方, ジェンダーやフェミニズム, 児童虐待について学んだ経験を持たない者が過半数を超えている。また, 学生時代に教育について友人や仲間と議論した経験を持つ者の割合は過半数を超える一方, 教員と議論した経験を持つ者は3割に満たない。

b. 現在の学習・研修活動

活動内容により異なる結果が見出された。回答者たちの多くは, 校内での研修活動に積極的に参加し, 同僚と学校での教育上の問題について話し合い, 書籍・雑誌を購入していた。他方, 教育研究団体に所属している者の割合が少ない。また, 回答者たちは比較的趣味・娯楽などのゆとりの時間を持ちながら, 生涯学習活動に学習者として参加することはあまりないようであった。

c. 中学生時代の経験

中学生時代の経験14項目を尋ねた結果の概略を述べる。項目末尾のパーセンテージは, 回答の「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」の合計である。

教師たちは, 「友人や仲間とよく話をした」(91.0%), 「学校に通うことは楽しかった」(86.4%), 「学校での勉強にまじめに取り組んだ」(80.1%), 「親とよく話をした」(76.3%), 「先祖の霊を祭る行事(墓参り等)によく参加した」(74.8%) 者が多い。他方, 「祖父母とよく話をした」(45.1%), 「学校の先生とよく話をした」(49.4%) の二つの項目についてあてはまると答えた者の割合は半数に満たない。

この結果より, 教師たちの多くは, 学校に適應して家族との関係も比較的よい傾向にあることがうかがえる。

これらの項目を集約するため, 主因子法による因子分

析を行い、バリマックス法による回転を行った。その結果、3つの因子が抽出された（表2）。因子1は「勉学への取り組み」（以下「H-F1」とする）、因子2は「年長者とのかかわり」（同「H-F2」）、因子3は「仲間集団とのかかわり」（同「H-F3」）に関する因子であると、それぞれ解釈された。

表2 中学校時代の経験の因子分析結果

| 項目 | 因子1 勉学への 取り組み | 因子2 年長者と のかかわ り | 因子3 仲間集団 とのかか わり |
|------------------------------------|---------------------|--------------------------|---------------------------|
| 7 家で、勉強をまじめにした | 0.877 | 0.074 | -0.006 |
| 6 学校での勉強にまじめにとりくんだ | 0.799 | 0.156 | -0.025 |
| 8 勉強でわからないことがあれば、積極的に調べた | 0.628 | 0.216 | 0.037 |
| 2 親とよく話をした | 0.158 | 0.658 | 0.014 |
| 4 先祖の墓を祭る行事(墓参り等)によく参加した | 0.079 | 0.620 | 0.068 |
| 3 祖父母とよく話をした | 0.035 | 0.573 | 0.115 |
| 5 学校の先生とよく話をした | 0.243 | 0.444 | 0.199 |
| 1 家の人の手伝いを積極的にした | 0.132 | 0.438 | 0.091 |
| 11 部活動にまじめにとりくんだ | 0.029 | -0.001 | 0.747 |
| 9 スポーツを積極的にした | 0.000 | 0.021 | 0.738 |
| 10 友人や仲間とよく話をした | -0.026 | 0.292 | 0.498 |
| 12 学校に通うことは楽しかった | 0.026 | 0.345 | 0.481 |
| 因子1 因子2 因子3 の 分散の % | 1.913 15.943 | 1.815 15.124 | 1.850 13.749 |
| 累積% | 15.943 | 31.068 | 44.816 |

注

- 因子抽出法：主因子法，回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法（以下同様）
- 因子1の絶対値が0.4以上のものを枠で囲んだ

(2) 属性間比較

1) 中学校時代の経験：t検定による

中学校時代の経験に関する因子得点を算出し、属性、すなわちジェンダー、在職年数（10年未満か10年以上か）、職階（管理職と非管理職⁽²⁾）による比較を行った。その結果は、表3に示したとおりである。同表中、t検定の結果有意であった項目には印を付した。

まず、性別比較の結果、女性は男性に比べ、H-F1およびH-F2について因子得点平均値が高い傾向にあった。つづいて、在職年数により比較した。H-F1については在職年数10年以上の回答者の因子得点平均値が高かった。一方、H-F2およびH-F3については、在職年数10年未満の回答者の因子得点平均値が高かった。なお、職階間の比較を行った結果、統計的に有意な差異はみられなかった。

表3 中学校時代の経験の属性間比較

| | | 女性 | 男性 | 検 | 10年以 上 | 10年未 満 | 検 | 非管理 職 | 管理職 | 検 |
|--------------------------------------|---------------|---------|-------|--------|-----------|-----------|--------|----------|--------|--------|
| 中 学 校 時 代 の 経 験 | 因子1 勉学への取り組み | 実数 | 258 | 204 | | 314 | 149 | | 421 | 32 |
| | | 因子得点平均値 | 0.116 | -0.140 | ** | 0.085 | -0.177 | ** | 0.013 | -0.205 |
| | | 標準偏差 | 0.850 | 0.989 | | 0.919 | 0.913 | | 0.918 | 1.036 |
| | 因子2 年長者とのかかわり | 実数 | 258 | 204 | | 314 | 149 | | 421 | 32 |
| | | 因子得点平均値 | 0.124 | -0.151 | ** | -0.061 | 0.152 | ** | -0.017 | 0.248 |
| | | 標準偏差 | 0.850 | 0.821 | | 0.838 | 0.816 | | 0.839 | 0.802 |
| 因子3 仲間集団とのかかわり | 実数 | 258 | 204 | | 314 | 149 | | 421 | 32 | |
| | 因子得点平均値 | -0.054 | 0.064 | | -0.104 | 0.221 | ** | -0.002 | 0.070 | |
| | 標準偏差 | 0.891 | 0.830 | | 0.890 | 0.770 | | 0.863 | 0.918 | |

注 表中の記号の意味は次のとおり（以下同様） ** p.<.01 * p.<.05

2) 学生時代および現職での学習活動

学生時代および現職での学習活動に関する項目については、属性によるクロス集計を行い、カイ2乗検定を行った。その結果は、表4に示したとおりである。

第一に、ジェンダーによる比較を行った結果について述べる。学生時代に子どもの人権、ジェンダーやフェミニズム、児童虐待について学んだ経験、学生時代子どもにかかわるボランティアに参加した経験をした者の割合は、男性よりも女性に高かった。他方、教育研究団体への所属については、女性よりも男性に多かった。

つづいて、在職年数による比較を行った結果、次のことが明らかになった。在職年数10年未満では、大学で子どもの人権やジェンダー・フェミニズム、児童虐待について学んだ者、学生時代に教育について教員と議論した者、ボランティア活動をした者の割合が高い。他方、在職年数10年以上では、教育研究団体に所属する者や、職務に関する書籍・雑誌やテレビに触れる者、そして職務以外に子どもとふれ合う機会がある者の割合が高い。

最後に、職階間の比較を行った結果、次のことが明らかになった。非管理職では、大学で児童虐待について学んだ者の割合が高い。他方、管理職では、教育研究団体への所属をはじめ校内外の研究活動に参加する者の割合が高い。また、職務に関する書籍・雑誌を購入する者や趣味・娯楽などのゆとりの時間を持っている者の割合が高い。

2. 教師のジェンダー観・子ども観

(1) ジェンダー観の因子分析

教師のジェンダー観について尋ねた項目は、16項目である。今回は、児童虐待に対する意識との関連を分析することを念頭に置き、家庭役割や権力関係に関連する項目を中心に尋ねた。

これらの回答データを用いて主因子法で分析を行い、

バリマックス法による回転を行った。その結果を、表5に示した。因子は4つ抽出された。因子1は、「体力において男性がまさる以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのはやむをえない」など6項目が高い絶対値の因子負荷量を示したので、「社会における男性の優位性」(以下「G-F1」)に関する因子と解釈される。

因子2は、「妻に働かせて自分は家で子どもの世話をするような男性を尊敬することができない」など2項目が高い絶対値の因子負荷量を示したので、「伝統的性別役割分業の肯定」(同「G-F2」)に関する因子と解釈される。因子3は、「母親が働くことは、学校に入る前の子どもにはよくないことがある」など3項目が高い絶対値の因子

表4 教師の職業的社会化経験

| no. | 項目 | 性別 | | | | 年数 | | | | 職階 | | | |
|-----|---------------------------|------|------|------|----|-------|-------|------|----|------|-------|------|----|
| | | 女性 | 男性 | 全体 | 検 | 10年以上 | 10年未満 | 全体 | 検 | 非管理職 | 管理職 | 全体 | 検 |
| 1 | 大学で、子どもの人権について学んだ | 62.1 | 45.1 | 54.6 | ** | 47.0 | 70.7 | 54.6 | ** | 55.3 | 40.0 | 54.3 | |
| 2 | 大学で、ジェンダーやフェミニズムについて学んだ | 25.3 | 17.9 | 22.0 | * | 11.9 | 43.3 | 21.9 | * | 22.3 | 9.7 | 21.5 | |
| 3 | 大学で、児童虐待について学んだ | 25.4 | 14.0 | 20.3 | ** | 10.1 | 42.0 | 20.3 | ** | 21.0 | 6.5 | 20.0 | * |
| 4 | 学生時代、教育について友人や仲間と議論した | 59.0 | 58.5 | 58.8 | | 57.8 | 60.7 | 58.7 | | 58.1 | 64.5 | 58.6 | |
| 5 | 学生時代、教育について教員と議論した | 24.1 | 28.0 | 25.9 | | 23.4 | 32.0 | 26.2 | * | 25.6 | 35.5 | 26.2 | |
| 6 | 学生時代、子どもにかかわるボランティアに参加した | 38.8 | 29.0 | 34.5 | * | 23.4 | 58.4 | 34.5 | ** | 36.1 | 12.9 | 34.6 | |
| 1 | 教育研究団体に所属している | 17.5 | 43.2 | 28.9 | ** | 35.6 | 16.9 | 29.7 | ** | 25.4 | 93.5 | 30.0 | ** |
| 2 | 校外の研修会に積極的に参加している | 43.5 | 46.6 | 44.8 | | 47.3 | 40.9 | 45.3 | | 43.5 | 80.6 | 46.0 | ** |
| 3 | 校内での研修活動に積極的に参加している | 84.3 | 87.3 | 85.6 | | 87.1 | 82.6 | 85.7 | | 84.6 | 100.0 | 85.7 | ** |
| 4 | 同僚と、学校での教育上の問題について話し合っている | 93.1 | 89.8 | 91.6 | | 94.3 | 86.0 | 91.6 | ** | 91.6 | 96.8 | 91.9 | |
| 5 | 職務に関する書籍・雑誌を購入している | 75.1 | 66.5 | 71.3 | * | 73.7 | 66.0 | 71.2 | | 69.8 | 87.1 | 70.9 | * |
| 6 | 趣味・娯楽などのゆとりの時間を持っている | 61.2 | 57.8 | 59.7 | | 60.8 | 58.4 | 60.0 | | 58.0 | 77.4 | 59.3 | * |
| 7 | 生涯学習活動に学習者として参加している | 24.2 | 19.0 | 21.9 | | 23.3 | 21.5 | 22.7 | | 22.8 | 22.6 | 22.8 | |
| 8 | 教育を主題とするテレビ番組を見ている | 50.0 | 54.4 | 51.9 | | 55.5 | 45.0 | 52.1 | * | 52.1 | 58.1 | 52.5 | |
| 9 | 職務以外に子どもとふれ合う機会がある | 48.8 | 52.2 | 50.3 | | 54.6 | 42.0 | 50.5 | ** | 51.4 | 45.2 | 51.0 | |

注 各項目について、「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」と答えた者の割合を示した

表5 ジェンダー観の因子分析結果

| 項目 | 因子1 社会における男性の優位性 | 因子2 伝統的性別役割分業の肯定 | 因子3 女性の就労と育児の両立の否定 | 因子4 - |
|---|---------------------|---------------------|-----------------------|----------|
| 13 体力において男性がまさる以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのはやむをえない | 0.677 | 0.188 | 0.046 | 0.133 |
| 14 女性は男性にくらべ、臆病だ | 0.612 | 0.289 | 0.287 | -0.117 |
| 16 男性は女性にくらべ、人を使うのが上手である | 0.565 | 0.175 | 0.217 | 0.148 |
| 12 たくましい精神な体つきは、男の魅力として重要である | 0.511 | 0.096 | 0.015 | 0.335 |
| 9 女性は家庭を管理した方がよく、政治や社会の管理は男性に任せておくほうがよい | 0.503 | 0.246 | 0.332 | 0.237 |
| 6 最終的に頼りになるのは、やはり男性である | 0.471 | 0.328 | 0.058 | 0.369 |
| 3 妻に働かせて自分は家で子どもの世話をするような男性を尊敬することができない | 0.200 | 0.565 | 0.141 | 0.157 |
| 1 夫が家事を受け持ち、妻が働いてお金を稼いでもいいと思う | -0.157 | -0.567 | -0.191 | -0.088 |
| 7 母親が働くことは、学校に入る前の子どもにはよくないことがある | 0.229 | -0.047 | 0.529 | 0.322 |
| 5 女性は家において、子どもの世話をする方が幸せであると思う | 0.231 | 0.199 | 0.465 | 0.433 |
| 11 働く母親も、働いていない母親とまったく同じように、子どもとの間にあたたかな安定した関係を確立することができる | -0.040 | -0.074 | -0.564 | 0.090 |
| 4 人前では、妻は夫を立てた方がよい | 0.194 | 0.223 | 0.029 | 0.534 |
| 8 一家の生計を支えられないような経済力のない男性は、男として失格である | 0.263 | 0.355 | 0.009 | 0.325 |
| 2 男性は女性にくらべ、攻撃的である | 0.274 | -0.012 | -0.039 | 0.177 |
| 10 女性は、男性にくらべ、感情的である | 0.380 | 0.243 | 0.092 | 0.155 |
| 15 キャリアを求める女性にとって、出産や育児がその障害になってはならない | -0.005 | -0.132 | -0.348 | -0.009 |
| 因子負荷量2乗和 | 2.386 | 1.268 | 1.247 | 1.137 |
| 分散の% | 14.914 | 7.923 | 7.796 | 7.105 |
| 累積% | 14.914 | 22.837 | 30.633 | 37.738 |

注 因子負荷量の絶対値が0.45以上のものを枠で囲んだ

表6 子ども観の因子分析結果

| 項目 | 因子1 保護・かわいがりの対象としての子ども | 因子2 大人への従属的存在としての子ども | 因子3 主体的な存在としての子ども | 因子4 - |
|-----------------------------------|---------------------------|-------------------------|----------------------|----------|
| 7 子どもは、大人が守ってやらねばならない存在である | 0.666 | 0.067 | 0.130 | 0.039 |
| 6 子どもは、かわいいものである | 0.631 | 0.040 | 0.193 | 0.170 |
| 8 子どもは、大人に安らぎを与えるものである | 0.547 | 0.098 | 0.159 | 0.184 |
| 5 子どもは未熟なので、大人が正しく導いてやるべきである | 0.377 | 0.279 | 0.002 | -0.089 |
| 1 子どもが大人の言うことを聞くのは、当然である | 0.038 | 0.756 | -0.010 | -0.221 |
| 10 子どもは、親など年長の家族の言うことを聞くべきである | 0.163 | 0.556 | -0.069 | 0.047 |
| 4 子どもには、自ら考える力がある | 0.028 | -0.095 | 0.711 | 0.116 |
| 2 子どもが自分の意見を言う権利は、認められるべきである | 0.171 | -0.147 | 0.505 | 0.084 |
| 3 子どもは、大人とは異なる世界を持っている | 0.165 | 0.071 | 0.398 | -0.066 |
| 9 子どもは、大人と対等である | 0.175 | -0.212 | 0.188 | 0.647 |
| 11 子どもは、どんな親であっても親のそばで暮らすことが幸せである | 0.079 | 0.308 | -0.113 | 0.308 |
| 因子負荷量2乗和 | 1.405 | 1.150 | 1.051 | 0.662 |
| 分散の% | 12.775 | 10.457 | 9.558 | 6.022 |
| 累積% | 12.775 | 23.232 | 32.789 | 38.811 |

注 因子負荷量の絶対値が0.35以上のものを枠で囲んだ

子負荷量を示したので、「女性の就労と育児の両立の否定」（同「G-F3」）に関する因子と解釈される。

（2）子ども観の因子分析

子ども観 11 項目について、同様に主因子法で分析を行い、バリマックス法による回転を行った。その結果、4 つの因子が抽出された。このうち、3 因子について解釈可能であった（表 6）。

因子 1 は、「子どもは、大人が守ってやらねばならない存在である」「子どもは、かわいいものである」など 4 項目が高い因子負荷量を示したため、「保護・かわいがりの対象としての子ども」（以下「C-F1」）に関する因子と考えられる。同様に、因子 2 は「大人への従属的な存在としての子ども」（同「C-F2」）、因子 3 は「主体的な存在としての子ども」（同「C-F3」）と解釈された。

（3）因子得点平均値の属性間比較

表 7 には、属性ごとの因子得点平均値の比較を行い、t 検定を行った結果を示した。

1) ジェンダー観

性別比較を行った結果、ジェンダー観については G-F1 については女性の因子得点が高い傾向にあった。他方、G-F3 については男性の因子得点が高い傾向にあった。

在職年数による比較を行った結果、G-F1 については、在職 10 年未満の者の因子得点が高い傾向にあった。職階による比較を行った結果、管理職は非管理職よりも、G-F2 および G-F3 の因子得点が高い傾向にあった。

2) 子ども観

子ども観について性別比較を行った結果、C-F2 については男性の因子得点が高かった。一方、C-F3 については女性の因子得点が高かった。

なお、在職年数、および管理職と非管理職の比較を表 7 ジェンダー観と子ども観の属性間比較

| a. ジェンダー観 | | | | | | | | | | | | |
|-----------|---------------------|---------|--------|----|---------------------|---------|--------|----|-----------------------|---------|--------|----|
| | 因子1 社会における男性の優位性 | | | | 因子2 伝統的性別役割分業の肯定 | | | | 因子3 女性の就労と育児の両立の否定 | | | |
| | 実数 | 因子得点平均値 | 標準偏差 | 検 | 実数 | 因子得点平均値 | 標準偏差 | 検 | 実数 | 因子得点平均値 | 標準偏差 | 検 |
| | | 値 | 値 | 値 | | 値 | 値 | 値 | | | | |
| 女性 | 245 | 0.007 | 0.813 | | 245 | -0.008 | 0.711 | | 245 | -0.197 | 0.748 | ** |
| 男性 | 198 | -0.038 | 0.817 | | 198 | 0.003 | 0.760 | | 198 | 0.238 | 0.742 | |
| 10年以上 | 302 | -0.100 | 0.820 | ** | 302 | -0.037 | 0.717 | | 302 | -0.017 | 0.778 | |
| 10年未満 | 140 | 0.200 | 0.834 | | 140 | 0.104 | 0.747 | | 140 | 0.042 | 0.779 | |
| 非管理職 | 403 | -0.008 | 0.839 | | 403 | -0.028 | 0.723 | ** | 403 | -0.022 | 0.771 | * |
| 管理職 | 30 | -0.032 | 0.854 | | 30 | 0.412 | 0.750 | | 30 | 0.316 | 0.789 | |
| 女性:配偶者無 | 106 | 0.1159 | 0.8175 | | 106 | 0.0458 | 0.8039 | | 106 | 0.004 | 0.7543 | ** |
| 女性:配偶者有 | 138 | -0.076 | 0.8051 | | 138 | -0.048 | 0.8224 | | 138 | -0.353 | 0.711 | |

| b. 子ども観 | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------------------------|---------|-------|---|--------------------------|---------|-------|----|----------------------|---------|-------|----|
| | 因子1 保護・かわいがりの対象としての子ども | | | | 因子2 大人への従属的な存在としての子ども | | | | 因子3 主体的な存在としての子ども | | | |
| | 実数 | 因子得点平均値 | 標準偏差 | 検 | 実数 | 因子得点平均値 | 標準偏差 | 検 | 実数 | 因子得点平均値 | 標準偏差 | 検 |
| | | 値 | 値 | 値 | | 値 | 値 | 値 | | | | |
| 女性 | 207 | -0.004 | 0.816 | | 207 | -0.108 | 0.840 | ** | 207 | 0.102 | 0.748 | ** |
| 男性 | 168 | 0.014 | 0.794 | | 168 | 0.141 | 0.761 | | 168 | -0.114 | 0.792 | |
| 10年以上 | 257 | -0.024 | 0.821 | | 257 | -0.011 | 0.828 | | 257 | -0.002 | 0.798 | |
| 10年未満 | 118 | 0.047 | 0.798 | | 118 | 0.001 | 0.791 | | 118 | 0.004 | 0.795 | |
| 非管理職 | 348 | 0.008 | 0.799 | | 348 | -0.017 | 0.814 | | 348 | 0.008 | 0.778 | |
| 管理職 | 24 | 0.026 | 0.882 | | 24 | 0.109 | 0.873 | | 24 | -0.116 | 0.800 | |

行った結果、統計的に有意な差はみられなかった。

3. 職業的社会化とジェンダー観・子ども観の関連

最後に、職業的社会化経験と他の要因が、教師のジェンダー観や子ども観にどのような影響を及ぼしているか、相関係数の分析と重回帰分析の結果をもとに述べる。

（1）因子間の相関係数

ジェンダー観、子ども観の各因子について、因子得点にもとづき相関係数を求めた。統計的に有意であった結果について、概略を述べる。

第一に、ジェンダー観相互の相関をみたところ、3 つの因子間には正の相関がみられた。

第二に、子ども観相互の相関をみたところ、保護・かわいがりの対象としての子ども観 C-F1 は、C-F2 と C-F3 の双方との間に正の相関がみられた。

第三に、男性優位的・伝統的なジェンダー観は、従属的な子ども観と正の相関にあり、主体的な子ども観とは負の相関にあった。すなわち、ジェンダー観 G-F1 および G-F2 は、子ども観 C-F2 との間に正の相関がみられた。他方、ジェンダー観 G-F1、G-F2、G-F3 は、子ども観 C-F3 とは負の相関にあった。

（2）重回帰分析

ジェンダー観および子ども観の計 6 因子のうちひとつを従属変数とし、他の因子を独立変数とする重回帰分析を行った。上記以外に独立変数として用いた変数は、次のとおりである⁽³⁾。

- a. 中学校時代の経験に関する因子（H-F1；H-F2；H-F3）
 - b. ジェンダー（gender：男性 0，女性 1）
 - c. 配偶者（spouse：配偶者なし 0，あり 1）
 - d. 在職年数（10years：10 年未満 0，10 年以上 1）
 - e. 職階（admin：非管理職 0，管理職 1 とする）
- 分析の結果を、表 8 に示した。

ジェンダー観を従属変数とする分析より明らかになったことは次のとおりである。第一に、主体的な子ども観

表 8 重回帰分析結果

| 従属変数 (定数) | G-F1 | G-F2 | G-F3 | C-F1 | C-F2 | C-F3 |
|--------------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| G-F1 | - | 0.162 ** | 0.085 ** | 0.050 | 0.275 ** | -0.233 ** |
| G-F2 | 0.154 | - | 0.052 | -0.061 | 0.103 | -0.207 ** |
| G-F3 | 0.081 ** | 0.052 | - | -0.007 | -0.031 | -0.148 ** |
| C-F1 | 0.043 | -0.056 | -0.007 | - | 0.117 * | 0.139 ** |
| C-F2 | 0.254 ** | 0.100 | -0.030 | 0.125 * | - | 0.067 |
| C-F3 | -0.229 ** | -0.215 ** | -0.152 ** | 0.158 ** | 0.071 | - |
| H-F1 | -0.039 | 0.012 | -0.075 | 0.008 | 0.097 | 0.001 |
| H-F2 | 0.052 | 0.111 * | -0.178 ** | 0.126 * | 0.047 | 0.010 |
| H-F3 | -0.019 | 0.075 | -0.047 | 0.171 ** | -0.056 | 0.039 |
| gender | 0.109 | 0.073 | -0.244 ** | -0.035 | -0.227 ** | 0.158 ** |
| spouse | 0.013 | 0.002 | -0.086 | -0.040 | 0.020 | 0.056 |
| 10years | -0.152 * | -0.029 | -0.032 | 0.032 | -0.002 | -0.086 |
| admin | 0.002 | 0.178 ** | 0.021 | 0.032 | -0.030 | 0.035 |
| R2乗 | 0.220 | 0.177 | 0.181 | 0.101 | 0.153 | 0.207 |
| 調整済R2乗 | 0.191 | 0.147 | 0.151 | 0.067 | 0.121 | 0.177 |

(C-F3) は、ジェンダー観に負の影響を及ぼしていることがわかる。第二に、中学校時代の経験のうち、年長者とのかかわり (H-F2) は、伝統的性別役割分業の肯定 (G-F2) に正の影響を及ぼし、女性の仕事・育児両立の否定 (G-3) には負の影響を及ぼす (4)。第三に、在職年数 10 年以上であることは、男性優位を肯定するジェンダー観 (G-F1) に負の影響を、管理職であることは伝統的性別役割分業の肯定 (G-F2) に正の影響を、女性であることは女性の仕事・育児両立の否定に負の影響を及ぼす。

子ども観を従属変数とする分析より明らかになったことは次のとおりである。第一に、ジェンダー観の三つの因子は、主体的な子ども観 (C-F3) に負の影響を及ぼす。第二に、保護・かわいがりの対象としての子ども観 (C-F1) は、他の子ども観に対し正の影響を及ぼす。第三に、中学校時代に年長者や仲間とのかかわりを持っていたことは、保護・かわいがりの対象としての子ども観に正の影響を及ぼす。第四に、女性であることは、従属的存在としての子ども観 (C-F2) に負の影響を、主体的な子ども観には正の影響を及ぼす。

以上の分析より明らかになったことのうち、とりわけ、伝統的なジェンダー観を持つことと主体的な子ども観を持つこととの間の負の関連については注目する必要がある。また、ジェンダー・在職年数・職階といった属性変数も、教師たちの価値意識になんらかの影響を及ぼしていると考えられる。

考察

以上の分析を通して明らかになったことより、考察を行う。

1. 職業的社会化における教員の小さな集団化

(1) 「仲間とのかかわり」の役割

教師たちの職業的社会化経験に関する項目の素集計結果より浮かび上がる教師像は次のとおりである。学生時代には教育について友人や仲間と議論していた一方、教員と議論した機会はそれほど多くなかった。

教職にある現在でも、教育研究団体に所属したり生涯学習活動に参加するよりはむしろ、書籍・雑誌を購入したり職場での同僚との間での情報交換をしている。

このような傾向から、教師たちの職業的社会化あるいは力量形成にあたっては、比較的近い関係にある者 (中学時代・大学時代の友人や仲間、学校の同僚) との関係性が大きな役割を果たしていることが推測される。

ただし、教員とのかかわりについては在職年数により違いがみられた。在職年数が 10 年未満の者は、10 年以上の者に比べ、教員と議論した経験を持ったと回答した割合が比較的高かった。このことは、大学における教員と学生の関係性の変化も背景にあると考えられる。

(2) 子ども・ジェンダー・福祉に関する知へのアクセシビリティのジェンダー差/世代差

大学で子どもの人権やジェンダー・フェミニズム、児童虐待に関する学習をした経験は全体的に多くなかったものの、とりわけ、比較的若い世代や女性に多い傾向にあった。子どもにかかわるボランティアについても、女性や若い世代が多く経験している。

これらの結果から、子どもやジェンダーや福祉に関する学習活動や体験活動へのアクセスが、女性や若い世代には容易であることが推測できよう。その背景には、「子ども」「ジェンダー」「福祉」に関する仕事や、それをめぐる諸問題が、しばしば「女性の領域」として取り扱われがちであることが考えられるのではないかと。

2. ジェンダー観・子ども観の構造

ジェンダー観と子ども観の分析を通して、主体的な存在としての子ども観は、伝統的なジェンダー観と負の関連を持つことが明らかになった。男性が優位であると考えることや伝統的性別役割分業を肯定することや女性の就労と育児の両立を否定することは、主体的な存在としての子ども観を持つこととは負の相関・負の因果関係にあった。他方、大人への従属的存在としての子ども観を持つことは、社会における男性の優位性を肯定することと正の相関にあった。

これらの結果より、子ども-大人関係と女性-男性関係は、ある程度似通っていることが考えられる。つまり、少なくとも本調査で対象とした教師集団においては、大人に対して子どもは弱い存在であるのと同様、男性に対して女性は弱い存在である、と捉えられている。しばしば「女-子ども」とひとくくりに取り扱われるこの二つのカテゴリーが、社会において「弱者」とみなされていることは、今後、児童虐待に対する意識との関連を分析するにあたって、留意すべき重要な点である。

3. ジェンダー観・子ども観をめぐる分化

—ジェンダー化の問題を中心に—

ジェンダー観および子ども観の分析より明らかになったことより、回答者のジェンダーや在職年数、職階により価値意識が異なることが推測される。

社会において男性が優位であると考えられる価値意識を有

する者、子どもを主体的な存在として捉えている者は、男性より女性に多かった。女性が仕事と育児の両立ができないと考える者、大人への従属的な存在として子どもを捉える者は、女性よりも男性に多かった。このような結果より、教師集団の価値意識はジェンダー化されている、と考えられる。

管理職は非管理職に比べ伝統的性別役割分業を肯定し女性の仕事と育児の両立を否定する傾向があった。また、管理職であることは、伝統的性別役割分業を肯定することに影響を及ぼしていた。

管理職がある種伝統的なジェンダー観を持つことは、管理職が男性によって占められていることとの関連も無視できない。管理職の割合は、男性回答者では13.6%であるのに対し、女性回答者では0.8%（2名）に過ぎない。管理職を男性が占める中で、男性がより働きやすい管理職文化が作り出されていることが推測できる。

ただ、重回帰分析の結果（表8）より、伝統的性別役割分業を肯定するか否かは、回答者のジェンダーよりも、学校内での管理職－非管理職間の関係性によるところが大きいことを示していた。したがって、職階にともなう非対称な関係性の影響も無視できないだろう。

女性内の分化について指摘された研究はいくつかある^{16) 17)}が、本調査の教師回答者の分析に限って言えば、女性管理職は、女性非管理職とそれほど価値意識には変わりはない。むしろ、管理職に限定したジェンダー比較を行ったところ、全サンプルによる分析に比べ因子得点平均値の差は大きく、管理職内ではジェンダーによる亀裂が非常に大きいことが推測される。

結語

本稿は、児童虐待に対する教師の意識について明らかにするための予備的な分析として、教師の職業的社会化に限定した分析を行ったものである。教師たちは、比較的近い関係にある人々とのかかわりを通して自らを形成していた。また、かれらは、社会的諸関係によって分けられた価値意識を共有していることが推測された。

今後は、教師たちの意識が、児童虐待に対する意識や実践的な対応のありようによつてどのような影響を持つか、分析を行う必要がある。また、本稿では分析対象に含めなかった一般回答者との比較で、教師集団の価値意識の構造を明らかにすることが求められる。

注

- (1) 「この」とは、同誌での前回の文献レビュー（伊藤、1973）以降、を指す。
- (2) ここで「管理職」とは、校長・園長・教頭、「非管理職」とは、主任教諭、教諭、養護教諭、その他、と分類。
- (3) なお、学生時代の経験も独立変数に含め分析を試みたが、統計的に有意な結果がでなかったので除外した。
- (4) 年長者とのかかわりが伝統的性別役割分業の肯定に負の影響を及ぼすことについては、そのかかわり方がどのようなものであったかを詳細に分析する必要がある。この点については、今後研究を進展させる上での課題としたい。

引用・参考文献

- 1 小林朋子，小池若葉：教職員の子どもの虐待に関する知識と対応について：学校とスクールカウンセラーに求める援助内容を中心として．カウンセリング研究 36(3)：240-245，2003.
- 2 耳塚寛明，油布佐和子，酒井朗：教師への社会的アプローチ：研究動向と課題．教育社会学研究 43：84-120，1988.
- 3 深沢宏，対馬清造：体育教師の職業的社会化に関する実証的研究．秋田大学教育学部教育研究所 研究所報 19：32-41，1982.
- 4 南本長穂，加野芳正：生涯学習の視点からみた教師の学びの構造：小中学校教師の学習実態と職業的社会的社会化．香川大学教育学部研究報告 79：59-95，1990.
- 5 小島秀夫，中村朋子，篠原清夫：教育管理職者の職業的社会的社会化の研究．茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）49：157-170，2000.
- 6 南本長穂，渡部佳世：女性教師の教頭職就任と教職意識：女性教師の職業的社会的社会化．愛媛大学教育学部紀要第I部教育科学，43(1)：1-24，1996.
- 7 佐藤学：教師たちの挑戦：授業を創る 学びが変わる．小学館，東京，2003.
- 8 齋藤孝：齋藤孝の相手を伸ばす！教え力．宝島社，東京，2004.
- 9 梶田正巳（編）：授業の知：学校と大学の教育革新．有斐閣，東京，2004.
- 10 山崎準二：教師のライフコースと成長：卒業生追跡調査を通して：稲垣忠彦，久富善之（編）：日本の教師文化．東京大学出版会，東京，pp.223-247，1994.
- 11 紅林伸幸：教師のライフサイクルにおける危機：中

- 堅教師の憂鬱. 油布佐和子 (編): 教師の未来・教職の現在: あすの教師像を模索する. 教育出版, 東京, pp.32-50, 1999.
- 12 氏原陽子: 中学校における男女平等と性差別の錯綜: 二つの「隠れたカリキュラム」レベル. 教育社会学研究 56: 29-45, 1996.
- 13 木村涼子: 教室におけるジェンダー形成. 教育社会学研究 61, 39-54, 1997.
- 14 Streitmatter, Janice: *Toward Gender Equity in the Classroom: Everyday Teacher's Beliefs and Practices*. State University of New York Press, Albany (NY), 1994.
- 15 伊藤裕子: 高校生における性差間の形成環境と性役割選択: 性差観スケール(SGC)作成の試み. 教育心理学研究 45: 396-404, 1997.
- 16 菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞・吉原恵子: 女子学生文化にみるジェンダーの現代的位相, 1993.
- 17 中西祐子: ジェンダー・トラック: 青年期女性の進路形成と教育組織の社会学. 東洋館出版社, 東京, 1998.
- 18 鈴木真由子, 渡辺亜紀代, 柿野成美: 教員のジェンダー形成要因. 新潟大学教育人間科学部紀要 1 (2): 151-161, 1999.
- 19 鈴木真由子: 教員のジェンダー観と男女平等教育. 新潟大学教育人間科学部紀要 2 (1): 21-27, 1999.
- 20 Dreyer, Nancy A., Woods, Nancy Fugate, and James, Sherman A.: ISRO: A Scale to Measure Sex-Role Orientation. *Sex Roles* 7 (2). 173-182, 1981.
- 21 住田正樹ほか: 子ども観に関する研究 (II). 日本子ども社会学会第 12 回大会抄録集, 46-49, 2005.
- 22 中村真弓: 子ども像の世代間分析. 九州大学教育社会学研究集録 6: 49-57, 2004.
- 23 清水一巳: 現代の子ども観と大人の行動傾向. 九州大学教育社会学研究集録 6: 67-83, 2004.
- 24 片岡徳雄 (編): 文芸の教育社会学. 福村出版, 東京, 1994.
- 25 東清和, 小倉千加子: 性差の発達心理. 大日本図書, 東京, 1982.
- 26 宮崎県: 関係機関の役割と連携のための子ども虐待対応・援助の手引き. 2003.
- 27 岡東壽隆, 鈴木邦治: 教師の勤務構造とメンタル・ヘルス. 多賀出版, 東京, 1997.
- 28 高山巖ほか: 小・中・高等学校におけるいじめおよび学校不適應防止対策プログラムの開発. 平成 9-11 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書 (課題 No.09410035), 2000.